佳作

わたしのばぁば

神奈川県 横浜市立川井小学校二年　川村 美乃莉

「ピンポーン。」

わたしの毎日は、この音からはじまります。わたしのばぁばは、二けんとなりにすんでいます。ばぁばは、毎朝小学校のと中まで、雨の日も、あつい夏の日も一しょに行ってくれます。

「お父さん早く。」

ばぁばが、じぃじをよんで、しば犬のゆずも来てみんなで行きます。この三人と一ぴきがベストメンバーです。

ある日の朝、いつものように歩いているとよわっている、ひな鳥を見つけました。わたしは、すぐにたすけてあげたいと思い、ばぁばへおねがいしました。

でもそのひな鳥は、わたしが小学校へ行っている間にしんでしまいました。ばぁばは、わたしへ、

「しかたないよ。」

と、言いました。ばぁばのしかたないと言う言ばは、いいかげんな言ばではなくて、わたしのためを思っての言ばです。なぜなら、わたしが小学校へ行っている間、ひな鳥にちゅうしゃきで、えさをあげてくれていたからです。

ばぁばは、わたしが小さいころから一生けんめいになってくれます。わたしがやさいがにが手と聞くと、はたけをはじめました。今でもはたけをつづけていて、たく山やさいがとれると、近じょの人へくばっています。そんなばぁばのすがたを見て、わたしは、かんどうしました。

そんなばぁばも、しつこいところやごういんなところがあります。じぃじが毎日、ピコン、ピコンと足をひきずりながら歩いています。それは、ばぁばが「いたいからと、歩かないでいると、ずっと歩かなくなる」と、しつこく言ったからです。おかげで、じぃじは毎朝わたしと歩くようになりました。ばぁばの言ばには、力があります。

今思うと、ばぁばは、わたしのことをいつもおうえんしてくれます。ようち園のかけっこでは、だれが見ても一ばんおそいけれど、ばぁばは、わたしへ、

「りっぱだった。」

「がんばっていた。」

「かわいかった。」

そして、

「はやかった。」

と、ほめてくれました。その言ばが、今でもビデオにのこっています。

ばぁばは、わたしがかなしいことがあると、一しょにかなしんでくれます。その分わたしがうれしいことや、楽しいことがあると、たく山わらってくれます。

わたしがいつかおばあちゃんになったら、ばぁばのような、やさしくて、まごにあいじょうたっぷりな、おばあちゃんになりたいと、心から思いました。